

第九講一九八二年三月二十四日①「主体の試練と災厄の予期」他

ミシェル・フーコー講義集成 < 11 > 「主体の解釈学」(2)
(コレージュ・ド・フランス講義1981-82)

ミシェル・フーコー著 廣瀬 浩司・原 和之訳 筑摩書房(2004年)

担当 ぱんこ

哲学者の「修練的なもの」の2つの系列

これまでに示した1つ主要なグループ「ギュムナゼイン」
＝現実の状況における鍛錬(training in real life)

(1) 節制の実践(practice of abstinence)

(2) 試練の養生法(regime of tests)→根本的な主題「生全体が試練として訓練され(exercised)、実践される(practiced)べきだ」につながる

↓

生というものは、古代ギリシア思想以来、まずはテクネーの対象であったが、
今や試練という大規模な儀式となり、試練の絶えざる機会となった

＝テクネーから試練への移行・再加工

＝テクネーが一生続く試練に対する、絶えざる準備となるべき

今日の講義: 修練のもう一方の系列

「省察」méditation(meditation)

→今日のフランス語が持つ意味よりずっと広い意味を持っている

参照) 弁論術におけるメレテー meletê の語の使われ方

- 内的な準備、思考に対する準備、思考による思考の準備
- 個人が公の場で話すこと、即興的に話すことを準備させてくれるもの

これまでの議論『アルキビアデス』<汝自身を知れ>

文献) プラトン『アルキビアデス』

- アルキビアデスが話しかけられ、ソクラテスにより、自分自身のことに専心しなければならないことが示される
- アルキビアデスに勧められる自己への配慮とは何かが尋ねられる
- 2つの問いに分かれる
 - ① 配慮しなければならないこの自分自身とは何なのか
 - ② どのようにして自分自身に配慮すべきなのか

＝ソクラテスによって、自己への配慮の根本的な様態が規定されている

- ソクラテスの自己への配慮の実践＝視線(looking)の訓練

その1; 同一性の関係が動力になる

- 「自己へ配慮しなければならない」＝「自分自身を見なければならない」
- 視線が同一者の同一者に対する関係 (relation of same to same) を打ち立てるという点で、視線が重要であり統治の方法を学ぶものになっている
＝同一性という一般的な形式が、視線に豊かさを与えている

その2; 神的要素の認知が到達点となる

- 魂が自分自身を見る
- この自己把握において魂は神的な要素を把握する
- この神的な要素が魂に固有な徳をかたちづくる
- 魂は完全に純粋な自分自身の鏡に自分自身を見る
- この鏡は神の輝きの鏡そのもの...完全に純粋
- この神の輝きにおいて自分自身を見ること＝魂は自分自身のものである神的な要素を認める

神的な要素が持つ2つの効果

(1) 魂の本質的な実在への上昇運動

(2) 本質的な実在性への認識を開く (opening to him knowledge of the essential realities)

本質的な実在性＝政治活動を理性的に基礎づけ、それを自分のものにすることができる

『アルキビアデス』の、＜汝自身を知れ＞の原則とは何か？

- 魂が自分の本性そのものを知ること、それによって魂と本性を等しくするものに到達すること
- 魂は自分自身を認識する→この自己認識の運動において魂は、記憶の底ですでに知っていたことを再認する
- 固有な本質 (essence) と実在性 (reality) において、魂とは何なのかを認識すること
- そして魂の固有な本質の把握が真理を開示してくれる
＝真理...魂が知っていた真理 (※自分の内にある魂が真理ではない？)
- この真理は、魂を認識対象とするような真理ではなく、魂が知っていた真理
- 魂は、自分がかつて置かれていた天空か天頂 (=heaven) において本質を觀照していらい、認識の主体となった
＝自己認識は本質的な記憶の鍵
＝自己に対する自己の反省性と真理の認識の関係は、記憶という形式で打ち立てられている
＝人が自己を知るのは、すでに知っていたことを再認するため

これは(↑)哲学者の「修練的なもの」とは異なる関係性を打ち立てている
弁論術におけるメレテの場合

(1) 自己認識が行われるのは、内的な二重化で起きている (同一性ではない)

- エピクテトス『語録』第一巻第十六章

- 人間が自分自身を配慮しなければならず、配慮することができ、配慮しなければならないという事実を特徴づけているのは、人間がある種的能力(faculty)を持つことであり、この能力は人間の本性の中に、他の能力とは異なる機能の中にある
 - 他の能力—話すこと、楽器を弾くこと—は道具を使用する能力であるが、それをすべきかどうか、するのは良いことかどうかを知りたいなら、別の能力=これらの能力を使用する能力が必要
=理性(reason)という能力
 - 自己への配慮が完成させられるのも、理性という能力によってであり、他の能力を使用するための操作や自由な決断の場においてである
 - 自己へと配慮すること、それはもてる能力をいい加減に使用することではなく、どれを使用するかを決定しながら使用することに他ならない=使用の善悪を決定するための別の能力が必要
- 自己への配慮と自己認識が行われるのは、能力の高低差をつける作業によってである
(プラトンの時のように、魂が自分を再認することではない)
- 能力に高低差(level)をつけ、自己の自己への関係を位置付け、固定し、確立する

(2) 自分自身への視線で捉えられるものは運動、表象、それによる情念(その実体と本質における魂の実在性ではない)

- 自己に対する視線や注意の対象となるのは、思考において起きる運動・そこに現れる表象・表象に伴うおもいなしや判断・身体と魂を動揺させる情念
- 下に向けられる視線で、それにより理性は自らを自由に使用しながら、表象の流れや情念の流れにおいて起きることを観察し、吟味し、判断し、評価する(※下への視線を使って理性が他の能力を使用する?)

(3) 神的なものとの類縁性が主体の側で発見される(対象の側ではない)

- プラトン...魂において発見される=対象の側
- ストア派の省察...他の能力を使用する能力が、私と神の類縁性を明らかにする
 - エピクテトスの文章
 - 動物と人間の違い...
 - 動物は人間に奉仕するために自分の必要なものを全て持っている
 - 人間は<理性>を持って、他のすべての能力の使用を決定し、自分自身に専心しなければならぬ
 - ゼウスとは...
 - ゼウスは自分自身に専心することしかない存在
=純粹状態の<自己への配慮>
 - 完全に循環し、何にも依存しない
 - ゼウスとは、「たえず自ら自分自身と共にある者」
 - 「ゼウス自身が自身と交わり、自分自身に安らい、自分自身の統治がどんなのかを考え、そして自分に似つかわしい思考に耽る」
 - 自分自身と共に生きること=完全に独立して生きる
 - 自分自身に安らうこと(アトラクシア)
 - 自分自身の統治とは何かを考え、自らの理性、神の理性の事物への働きかけを見ること=自分や他者に行使する統治を反省する

- 自分に相応しい思考に耽る、つまり自分自身と会話すること＝対話すること、自分自身と語ること
- この4つが賢者の立場を位置付ける
- ただし、賢者の方は達する者だが、ゼウスをこの立場に置くのはゼウスの存在そのものである
- 自己への配慮のモデルとしてゼウスを考えてみた場合、では、私たちはどうすれば良いのか？
- エピクテトス
 - 「私たちは私たちと会話できなくてはならない、他者なしでも生きていかななくてはならず、私たちの生を満たす方法で思い煩ってはならない」
 - 「私たちは反省しなければならない、ゼウスは自分自身の統治について反省するが、私たちは神的な統治について、外から反省しなければならない」
 - 「それは世界全体と私たちに課せられてくるものとして反省されなければならない」
 - 「まず世界の残りの部分との関係について反省すること(他者たちとの関係でどのように振る舞うべきか、どのように自らを統治すべきか)」
 - 「私たちは出来事に対してどのような態度をとってきたのか(何が私たちを苦しめるのか、それを癒し取り除くにはどうすれば良いのか)」
 - こうしたことがメレテーやメレターンの対象になる
 - 省察の訓練が必要＝さまざまなものに対して私たちの思考を行使しなければならない。
- ＜思考訓練＞
 - 出来事にどのような態度を取れば良いのか？
 - どのような事柄に苦しめられているのか？
 - それをどのように療すことができるのか？
 - どうしたら取り除けるのか？

(4) プラトンの視点と、ストア派の省察の視線の違い

- プラトンの場合に把握される真理
 - ...他の人を導くことを可能にしてくれるような本質的な真理
 - 自分自身への視線は記憶に関する再認、想起的な再認
- ストア派の場合
 - ...思考されたものの真理へと向かう
 - 諸表象やそれらに伴うおもいなしの真理を試練にかけること
 - 私たちはこうした試練を受けたおもいなしの真理に従って行動することができるのか、私たちが思考する真理のいわば倫理的な主体となることができるのか、などを問う
 - 自己への視線は、主体を真理の主体として構成するような試練であり、省察という反省的な訓練による

【以上から考えられる仮説】

西欧においては、思考訓練の三つの大きな形式、思考の思考自身に対する反省の三つの形式があるのです。

(1) 記憶(memory)という形を取る反省性

- この反省の形式では、真理への到達が可能になる
- その 真理は再認という形で認識される
- 記憶されている真理への道を開いてくれるこうした形式のいて、主体は変容させられてしまう
 - 記憶行為において、主体は自らの解放、自分の祖国への回帰、自分自身の存在への回帰を果たすから

(2) 省察(meditation)

- 思考されるものの試練
- 思考していることを実際に思考している主体、思考しておる通りに行動する主体、主あたいのある種の変形を目的として行動する主体としての自分自身を試練にかける
- 主体の変形によって、主体は真理の倫理的主体として構成される

(3) 方法(method) (注; デカルト的方法)

- あらゆる可能な真理の基礎となるような確信を定め、この固定した点から出発して真理から真理へと歩み、ついには客観的な認識の組織化と体系化に至るようなものなのです
- 三つの大きな形式(記憶、省察、方法)が、西欧において哲学の実践と訓練を支配し、哲学としての生の訓練(practice of life)を支配してきた
- 古代思想全体は、記憶から訓練的な省察への長い移動
 - プラトンに始まり、その到達点は聖アウグスティヌス
- 中世から近世初期、そして16~17世紀に至る道のりは、省察から方法へ
 - 基本的文献はデカルト『省察』
 - 方法を構成するものの基礎づけを行なっている

今年の講義で示そうとしたこと

- フランスの歴史伝統や哲学的伝統において(西欧一般において)、主体や反省性や自己認識などの問題の分析全体の導きの意図として特に重視されたのは<汝自身を知れ>という自己認識
- しかし<汝自身を知れ>だけ考えると、偽の連続性が打ち立てられ、うわべだけの歴史(=自己認識の連続的な発展)が作られてしまう
- 私がしようとしたのは、<汝自身を知れ>を、ギリシア人が<自己への配慮>と呼んだものの傍に置くこと、自己への配慮という文脈や土台の上に置くこと
- 古代思想における、自己認識と自己への配慮の恒常的な連関を考慮すること
- 自己への配慮は、完全に認識ではなく、複雑な実践であり、全く異なった反省性(reflexivity)の諸形式を生み出す
- よって<汝自身を知れ>と<自己への配慮>は互いに干渉したり連結したりし、<自己への配慮>は<汝自身を知れ>の真の支柱
=自分自身を認識しなければならないのは、自分に専心しなければならないから
→自己への配慮にこそ、自己認識の諸形式の叡智氏と分析の原則を求めないといけない
- 反省性の諸形式、主体を主体として構成する反省性の諸形式の分析論から始めること、その実践の歴史を辿ることで、<汝自身を知れ>の原則に意味を与える

- その意味は可變的であり、歴史的であり、決して普遍的なものではない

「修練的なもの」におけるメレタイ(省察、自己に対する思考訓練)

(1) 思考されるものの真理の吟味(表象に伴うおもいなしの真理の吟味)

examination of the truth of what we think(examination of opinions which accompany representation)

→訓練的省察(メレタイ)の諸形式は、まずは思考される真理の吟味を目指す

...与えられるがままの諸表象を監視し、それが何であるか、何に関係しているのかを観察し、それに対する判断や、それが引き起こしうる運動や情念や感情や情動を観察する

(2) 自分自身を真理の主体として試練に欠けるような試練

series of test those that test of oneself as the subject of truth

「わたしは本当にこうした真の表象を思考している主体なのか？」

「真の事象を思考する主体であるとしても、私はこの事象を認識するものとして行為するものであるのか？」

「わたしは本当に私が認識している真理の倫理的主体であるのか？」

...「倫理的」

=災厄の予期(*premeditatio malorum*; the premeditation or presumption of evils)、

死の訓練(the exercise of death)、良心の吟味(the examination of conscience)

①災厄をあらかじめ予期したり、推測したりする訓練

ギリシアの思考の特徴

...未来の思考、人生の方向づけ、未来についての反省や想像などについての不信感があった

- ギリシア人の眼前にあるのは未来ではなく過去であり、未来に対しては後ろ向きに進入していく
- 未来に心を奪われるままではいけない、ということが自己の実践において基本的な主題である
 - 人は未来によってpraeoccupatus(あらかじめ占有)されている
 - 【ギリシア思想の自己の実践における3つの主題】
 - (1)未来が人の心を奪うこと
 - (2)未来があらかじめ人の心を占めてしまうこと
 - (3)従って自由にしてくれないということ

1.記憶の優位

- いくつかの特別な場合のみ、過去の思考は肯定的な価値を持つ
- 未来の思考の否定的な価値と、過去の思考の肯定的な価値の対立は、記憶と未来の思考の二律背反な関係の定義に結晶化する
- 未来に向かうものは責められるが、記憶の方に向かうものは尊重される
- 記憶についての反省が、同時に未来に対する態度でもあると考えられるようになったら、西欧の思考において大きな変化となる
 - 進歩という主題、歴史についての反省形式という西欧の歴史意識の新たな次元は、ずっとのちになって、記憶への視線が同時に未来への視線であると考えられるようになった時に初めて獲得される

2. 理論的・哲学的・存在...論的な思考→未来は無(nothingness)である

- 自己の実践において問題になるのは、存在するものを統御できること、存在するものを前に、あるいは生起するものを前にして存在するものを統御できること
- 未来は無であるか、すでに決定されたものであるために、私たちは想像力か無能力に閉じ込められることになる

プルタルコスの記事「爽快な気分について」

- 「愚かな者(ストウルティティア)」＝哲学的な立場の正反対に立つ者
- 心が将来のことばかり熱心に目を向けるので(stultusである、未来に心を奪われている)何か良いものが目の前にあっても見過ごしたり注意を向けなかったりするが、賢い人は、かつてはあったが今はすでにないものまで、記憶を手繰り寄せて現前させる
- 自分自身に専心しない人...stultus・anoëtos＝自分自身に専心しないため未来に心を奪われる
 - 現在を受け入れることができない、現在に注意することができない。現在はすぐに過去になってしまうと考える
 - 過去のことを考えないために、現在のことも考えず、無や非存在でしかない未来に向かってしまうような人
- なっている縄の先をロバに食われるがままになっている縄作りのイメージ
 - 自分のしていることにも自分自身にも注意しない者の散漫な人生はどのようなものになるのかを表す
 - 自分がしていることを何か別のものによって食べられるがままでいる人
 - 起きること全て、忘却によって食べられるがままでいる人は、行動もできず、成功もおぼつかない
 - 記憶を実践せず、忘却に身を任せるならば、社会生活や快楽の生活や間暇の生活などを全体化する可能性はないということ(＝全体化)
 - 自身を一つの同一者(identity)として構成することもできない
 - 未来にすっかり心を奪われ、忘却に蝕まれている人は、考える人である

時間や物質の絶えざる流れや非連続性...キュレネ派

- 「以前のことを記憶によって保存する、取り戻すことをせず、流れ去るがままにしている人は、実は日々の自分を小さくし、空虚にして、去年やおとといのことや昨日のことは、自分には何の関わりもない、自分の身に起こったことではないと、明日ばかりを頼りにする」
- 剥奪や空虚にも運命付けられている＝無の中にいる

記憶の態度と未来の態度の対立

- セネカ「利益の楽しみを狭い範囲に限るのが、現在をのみ楽しんでいる人です」
- ※セネカの特徴「未来のことも過去のことも我々を喜ばしてくれる」
→批判されているのは現在の態度、未来や過去により開かれた態度や知覚を推奨しているように見える
- 「未来は期待によって、過去は記憶によって喜ばしてくれる」。一方で、未来は生ずるかが不定だが、過去はなかったことはあり得ない。

記憶という訓練

(1)ある実在の形式を捉えることを可能にする

- 実在の形式を捉えることを可能にする
- 実在の形式は、それが存在した限りにおいて私たちから奪われることはない
- 存在した実在的なものは、記憶によって私たちの意のままになる

- 記憶＝存在したものの存在様態。この限りで、私たちが私たち自身に実際の至上権を持つことを可能にし、私たちはこうして記憶の中を散歩することができる

(2) 記憶という訓練は神々に対する感謝や謝恩の賛歌を歌わせてくれる

- マルクス・アウレリウス『自省録』
 - 一種の自伝として神々に感謝の念を捧げている
 - 自分自身の物語でもあり、神々が与えてくれて恩恵への賛歌でもある
 - 幼年時代や青年期などの過去について語り、そのように育てられたのか、どのような人々にあったのかなどについて語る

- 記憶の訓練が未来の訓練より優越していること、それも絶対的でほとんど排除的な形で優越していること

ストア派...不幸や災厄の予期という訓練

- ※エピクロス派の反論...「起こらないかもしれない災厄に専心する必要はない」
 - 訓練その1...avocatio
 - 災厄についての表象や思考を遠ざけ、快樂についての思考、つまり人生においていつか到来するかもしれない全ての快樂についての思考へと目をむける
 - 訓練その2...revocatio
 - かつて経験した快樂を思い出すことによって、起こりうる不幸や災厄なものに対して身を守り、防御しようとするもの
- スtoa派の訓練...＜災厄の予期＞の実践
 - 修練一般という訓練は、真の言説という備え(equipment)を人間に与えることを機能とする
 - 必要が生じた時、人間はこの備えに助けを求めることができる
 - 例) 本当は事象の自然で必然的な一事件に過ぎないのに、あまり注意を払わないと災厄のように思えるような出来事が生じた時に、この備えに助けを求めることができる
 - 故に真の言説を備えておかなければならない
 - One should then equip oneself
 - ある出来事に急に襲われた人は、驚きがあまりに強く、この出来事に対する備えができていないと、無力な状態に陥ってしまう可能性がある
→ 助けとしての言説、依拠すべき言説を手には持たない
→ 備えがないと、出来事に侵入され、それに影響されてしまう

→ 備えがあると、しかるべき方法で反応し、混乱したりせず出来事を統御できる
 - 出来事に対して準備し、災厄に備えること
 - 訓練を受けていない人は、「適切で有益な態度を取るために反省に依拠することができない」

＜災厄の予期＞の実践

- (1) ＜災厄の予期＞とは、最悪の事態(the worst)の試練のこと

- 最悪である＝起こりうることは全て起こるはずだ、という考え方
- 災厄の網羅的な探索
- 可能な災厄、最もひどい災厄が起こることを考えなくてはならない

(2) 最もひどい災厄は確率論で起こるのではない

- 自分自身に与える一種の確信の中で、不幸に対する訓練をしなければならない
＝いずれにせよそれは起きるだろう
- セネカの書簡(息子を亡くした人宛の手紙)...不幸が列挙される
「君が運命に負けずに元気を奮い起こし、運命のあらゆる飛び道具を警戒してもらいたかったからです。それも飛び道具が、あるいは飛んでくるかもしれない、といったことではなく、今に必ず飛んでくるということです」

(3) 不幸は直ちに訪れると考える

- 世界のこの上なく偉大な帝国を覆すには、一日、一時間、一瞬だけあれば良いと考えた人がいるが、この人はまだ時間をかけ過ぎている
- これは未来に対する思考とは異なる...むしろ未来を閉鎖する
- 未来に固有な次元を、思考によって体系的に無効にすること。さまざまな開かれた可能性を持った未来ではない
- 必然的に起こることとして、起こりうることを自分に与えること
- 現在から出発して未来をシュミレートするのではなく、未来全体を自分に与えて、それを現在としてシュミレートする

We do not start from the present in order to simulate the future; we give ourselves the entire future in order to simulate it as present.

現在性の縮減(reduction of reality)

- 未来における災厄の現前性を無効にすること(evilにしないこと)
- セネカの書簡「その災いが何であろうと、君自身でそれを判断し、君の恐怖を査定すること。そうすれば、君が恐れているものは大したことでもないし、長続きするものでもないことがわかる」

未来についての思考と想像力の関係

- 未来に不信を持つのは、未来が想像力を呼び求めてしまうから
- 未来についての思考が、それが通常現れてくる地位から少し落とし、少なくとも不幸としては無であるような現実の姿に引き戻されるように、思考を働かせること
- 死について考えること...さまざまな想像的な道具を伴って現れるが、想像をなるべく縮減する
「痛みは、耐えられないほど強烈なものである(＝死ぬので苦痛は短い)か、あるいは耐えられるものであるのかのどちらかである」
→耐えられるもので、死ぬほどでもなかったとしたら、苦痛は軽いということ

<災厄の予期>＝未来の無効化、削ぎ落として単純な実在性を縮減すること

→真理を手に備えることができる

...この真理とは、何か出来事が起きた時に、さまざまな表象を、その厳密な真理の要素だけに縮減することに役立つ

<コメント&メモ>

- p.511, l.17「この真理は、魂を認識対象とするような真理ではなく、魂が知っていた真理なのです。」
「魂」とは何かがここに来てとても難しく感じた。魂の位置付けの違いも出てきていて(真理と魂の関係性)、ますます整理が追いつかなかったが、「自分の魂を見出すことが真理である」(＝これはキリスト教的・現代的主体のあり方とも近い?)と、「まさに鏡における視線の跳ね返りとしての自分の魂が主体となり己が知っていた真理を思い出す」(＝これがアルキビアデスでの自己と真理の関係?)ということで読んでみた。
- 神が世界を作ってくれる、神に与えられるという意味で神を置くのではなく、自己に対して神のような存在としての自己を位置付ける(理性的であること)、これをもって4つの思考を巡らすこと、というふうに整理した。自己を統治することにつながっている重要な視点だと考えた。自分に対して理性的に能力を使用するには、視線が一度外を向いており、それが跳ね返る時に自分を自分の神のように位置付けることができる、と繋げて良いのか?その点で、キリスト教的な自己の統治とは大きく異なり、またその延長にあると考えられる現代の自己論とは全く異なる(切り取れば確かに自分語りや自分のみを考えている点で類似しているように考えたが、ゼウスの視点では理性が自分を操るのに対し、“何にも操られていないこと”が、自由として、また主題として焦点化されているように思う)。
- 自己への配慮は、反省し(そのためには外に開かれていなくてはならない)、それを自分に返して、主体を変容させるということ。
- 防災について。少し前の回で“予知学者”が地震を予測することを語っていたのを思い出した。今の防災の方向性は、そういう「いかに自分たちが災厄を凌駕するために、予測するか」になっていて、ここでの「いかに災厄を自分ごとにし、現在起きていることや過去の実践から学び、災厄に今、備えるか(＝予期)」とは真逆の方向に進んでいると考えた。
- 自由は未来への想像ではなく過去の実践の集積なのだと読んだ。
- 「〇〇は明日から!」「明日の自分に期待しよう」では自分を小さくするばかりなのだなと考えた。
- 期待するということをめぐる問題。今起きていることと成したことを拾い上げるという点から考えることもできそう。
- 快樂の位置付けも興味深いと思った。期待や未来に快樂を求めるのではなく、起きたことや今に求める(これが哲学的な間暇なのだった)、リアルな喜びがあるという見方なのかなと考えた。ヴァーチャルではなく、願ったり想像したりするのではなく、実在的に得られるものがある、ということ?
- ちゃんと事象を見れるようになるということ、そのためには真の言説による備えが求められる。真の言説には自己の反省性が必要。そしてその自己の反省性は主体の変容(≡教育、師の存在、パレーシアという様式)が必要であり、すなわち他者や世界を見ることで自分を振り返るということ。
→災厄への備え、あるいは災厄の見極め。
- p.526, l.1-2「備えがないと無力になる」＝学びの危機の行き着く先は無力化とも言えるのではないか?
- AIでは未来を考える学びができない(確率であり、予測でしかなく、可能性を提示するだけである、究極の机上の空論シュミレーター)とも考えられそう。自分でこの過程を踏むことに意味があるのではないか?

『アルキビアデス』<汝自身を知れ>＝回想、想起

・自己の同一性、鏡

・魂の跳ね返りによる神的なものが真理を思い出す

↓

ストア派 災厄への備え

↓

エピクテトスら(ヘレニズムあたり)＜自己への配慮＞＝省察

・自己への配慮という技法の確立

・理性によって自己への配慮を使用すること

↓

(キリスト教による＜自己への配慮＞の歪曲

・羊、神への告白

・己の中に真理を見出しそれを懺悔すること)

↓

デカルト的契機、方法＜汝自身を知れ＞

↓

(???)